

野見宿禰と相撲について

—相撲の神を祀る野身神社に着目して—

日下 遼祐 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 菅井京子

キーワード：相撲，野見宿禰，高槻

序論

本研究の目的は、高槻に相撲の神とされる野見宿禰が祀られている神社がなぜあるのか。また高槻とどのような関係があるのかを明らかにすることである。用いる資料は、『相撲記』、『日本架空伝承人名事典』、『てんじんさん風土記』、『相撲の歴史』、『高槻市歴史博物館資料』、『高槻市ホームページ』、上宮天満宮発行「てんじんさん」、などである。また上宮天満宮、今城塚古墳の見学及び、上宮天満宮の宮司さんのインタビュー調査を行う。

I. 野見宿禰

野見宿禰は相撲の神様とされる人物である。紀元前1世紀頃、垂仁天皇7年7月7日に野見宿禰と当麻蹶速との決闘があった。これが相撲の始まりとされている。もう一つ有名であるのが、土師氏の長としての宿禰像である。野見宿禰には、従来の殉死の風習を改め埴輪を立てることを計画し天皇より評価されたという話がある。彼は、出雲より土師部100人を呼び、自ら指揮して埴輪を作った。墓の設計や祭祀道具揃えも含め土師達を率いる族長こそが祭祀者であった。その祭祀者こそがノミのスクネであった。古語ではノミは「祈み」スクネは「直の根」ということから、ノミ・スクネは「神に祈る直系の長」と意味することができる。目に見えない「野霊」を支配し、良き稲田を設けるためにお祈り用の土器に盛った諸々の捧げものを行う。すなわち埴輪を使って神祀りをする。これが祭祀者であり、本来のノミ・スクネであると考えられる。

II. 高槻と埴輪

高槻市の中心街にある上宮天満宮の境内の中に野見宿禰の塚がある。現在そこは野身神社と呼ばれている。上宮天満宮には菅原道真、野見宿禰、武日照命が祀られている。菅原道真は土師氏の子孫である。土師氏は、埴輪を造り葬祭をしていた一族である。また高槻市に住む土師氏である野見族が、亡くなった菅原道真を悲

しみ、祀るために10世紀頃、すでに野身神社があるところに上宮天満宮を建てた。実際に上宮天満宮よりも先に野身神社が建てられていることがわかった。そんな高槻には、新池埴輪製作所があり、多くの埴輪が見つまっている。また5世紀中頃から6世紀中頃までの約100年間操業していた。ここで造られた大量の埴輪が三島地域の有力者の墓に立て並べられていた。継体天皇の陵墓、今城塚古墳からは家形埴輪や、武人埴輪、角笛埴輪などがみつまっている。これらの埴輪は当時の天皇家の生活を表現しているものである。さらに武人埴輪は相撲とりの埴輪である。相撲は本来格闘を意味するものであるが、農耕儀礼として社会の中で重要な役割をはたしていた。この農耕儀礼であった相撲が当時の生活にあったからこそ埴輪として形になって残っているといえる。

結論

現在の天神山を北端にして、東西1キロメートルの幅で旧高槻市市街地を南へ3キロメートルの地域が野身郷と呼ばれていた。そして郷の長を葬って、新たな長が祭祀を行う。このような郷長こそが野見宿禰である。一つの円墳上に郷長たちの祖霊を祀る場所として小社を作った。これが現在も同じところに引き継がれ、古社野身神社として残っている。このようなことから土師氏の一族は高槻に栄えており、島上郡野身里(野身郷)と呼ばれていた。このようなことから、野身郷の人たちは祭祀者として活躍し、野見一族全体で古くから伝承として野見宿禰伝説、野見宿禰の言い伝えが代々受け継がれてきたからこそ、今もなお高槻市に野身神社が存在しているといえる。

引用・参考文献

- ・新田一郎(1994年), 相撲の歴史, 山川出版社, 12-14, 44-46, 50-51頁
- ・丹家 広志(1995年), てんじんさん風土記, アクティイ, 10-15,16-19,21-22,23-24頁